

「牧民運動と革命」 松村晴恵

第一部 遊牧社会の特徴と発展 もくじ

第一章 モンゴルの自然と遊牧 ……1

- 1 遊牧社会停滞論
- 2 移動は不可欠

第二章 モンゴル遊牧社会の特徴と発展……3

- 1 自然経済と表裏一体
- 2 自然経済の崩壊
- 3 土地も家畜も基本的生産手段
- 4 遊牧共同体の移り変わり

脚注

第一部 遊牧社会の特徴と発展

第一章 モンゴルの自然と遊牧

1 遊牧社会停滞論

ソ連消費組合中央連合会によって、1919年に行われたモンゴル調査の報告書¹に、マイスキーは、モンゴル人の思想の最大の特徴が、極端に消極的であることだと記している。その原因を、「大きな面積と距離とを有し、気候は極端に大陸的であり、土壌中には砂礫岩石甚だ多く、動植物は貧弱で生存に不適當な大不毛地がある²」といったモンゴルの自然環境に求め、「無気力、懶惰、諦め主義及びその日その日の与うる僅かなものに満足する習慣を養う様、殊更自然が出来あがって居る様に感じられた³」というのである。さらに、物資的不足、文化の遅れ、専制的政治制度、長期にわたる外国からの支配、仏教浸透等の歴史的影響も加わって、モンゴル人の消極的性質は定着し、長期にわたって歴史の決定的要因になった⁴と決めつけている。彼らの唯一の生活手段である牧畜においてさえ

も、極めて幼稚な牧畜法という形で、その消極的性質が表れているとしている⁵。

ズラートキンも、17世紀から19世紀までのモンゴルの牧畜に触れて、「牧民にとって、牧畜は、ことのほか重要な意義を有しているにもかかわらず、常に原始的な方法で行われていた。家畜は一年を通「じて自然の牧草地に置かれた。モンゴル人は、自然牧地の草飼料をあてにして、牧草を刈りもせず貯蔵することもなかった。モンゴル人は、家畜飼料の確保のために移動しなければならなかったのである⁶」と述べている。

マイスキーがいうように、実際にモンゴル人が徹底的に消極的で、懶惰、無気力な生活態度に甘んじていたとすれば、清朝中国からの独立運動、横暴な封建王侯と闘った牧民運動、そして人民革命の勝利といったモンゴル史の展開をどのように説明したらよいか。また、何よりもまず、モンゴル人は本当に、マイスキーやズラートキンがいうように、自分たちの唯一の生業であった牧畜に不熱心で、自然の奴隷と化し、厳しい自然条件を乗り越えて生活を向上させるという努力を怠っていた、といえるのだろうか。

牧民運動という牧民の主体性・積極性について論じるにあたって、まず、このような遊牧社会停滞論を検討する必要がある。その検討作業の機軸は、自然条件と生産過程を基本にして、遊牧社会の特徴と発展を正確に把握することである。

本章では、モンゴルの遊牧が、激烈な自然との闘いというモンゴル民俗の能動的営為の所産であることを明らかにしておきたい。

2 移動は不可欠

中央アジアの東部に位置するモンゴルは、その殆どが草原、ステップ、砂漠でおおわれ、乾燥、寒冷の厳しい大陸性気候を有している。日本の4倍もの広大な土地に人口は極めて少ない。こうした諸条件を見ても、モンゴルの大地に遊牧が適合することは容易に想像できるが、以下に示すような、牧地・牧草の特徴⁷を知るなら、一層明白である。

①ほとんどの牧地には、冬春の最も厳しい季節の家畜飼料となるような、冬でも枯れない種類の草がある

②秋に、雨が少なく、急激に寒くなって草が枯れるので、枯草でも栄養分があまり損なわれずに乾燥状態で保存され、冬の家畜飼料になる

③ステップ、ゴビ砂漠の牧地の植生は、丈が低く疎らだが、草の栄養価が高い上に、殆どの草があらゆる種類の家畜の飼料になる

④さまざまな地形・植生をもつ多様な型の牧地が混在しているので、季節の移り変わりに応じて、適切な牧地を選択することができる

⑤一般的に、全種類の家畜の飼料となる草が豊富で、毒草は極めて少ない

⑥冬春に、雪が比較的少ないので、家畜を放牧するのに都合がよい

牧地、牧草というこの豊かな資源を、最も有効に利用する方法が、移動を根幹とする遊牧である。

それでは、モンゴルの遊牧民は具体的に、どのような場合に移動するのだろうか。

一般的に、夏であれば、より涼しい場所を求める場合や、雨が降らず牧地が干あがって草、水、ソーダが不足した場合。冬であれば、より暖かい場

所を求める場合や、牧地が雪や氷に覆われて放牧が不可能になった場合。春であれば枯草がなくなってしまう場合。秋であれば、まだ枯れていない牧地を求める場合である。

また季節に関わらず、植物分布が家畜に適切でなくなる場合、畜糞で固めて作った家畜の寝床(өтөг бууц)が蒸発してなくなってしまう場合、干ばつ(ган)や大雪(зуд)などの天災が起こり乗り切る見込みがない場合、人や家畜の伝染病が発生する場合、火災や水難にあった場合、盗賊集団の襲撃等の犯罪事件にまきこまれた場合、身内の者や家畜が死んだ場合、他の家族と合流する必要が起きた場合に移動する。

以上のように様々な理由で、牧民は家財道具をまとめ、家族とともに家畜を従えて移動する⁸。突発的災害や事故、風習や人間関係といった要因から移動する場合もあるが、大方は家畜にとって最良の条件がととのった牧地を求めて移動するのである。

マイルスキーやズラートキンは、畜舎の設置や牧畜の備蓄をしようしないモンゴル人の牧畜法を原始的だとし、マイルスキーは、その原因をモンゴル人の消極性、懶惰性に帰した。しかし、現在の社会主義モンゴルにみられるような、牧草の刈取・運搬・備蓄等によって、農牧業を物資的技術的な面で支える全国的組織が確立されていない過去の遊牧社会において、しかも厳しい自然条件下で移動が欠かせない生活に、そのような余裕や可能性があったのか、また、その必要性があったのか。

アザロフによると、飼料用の草刈や固定畜舎の設置を望まない理由について、牧民自身、次のよ

うに説明している⁹。

第一に、移動は不可欠であり、しかも牧民が望んでいる場所、あるいは去年いた場所に移動するの
か否かが、定かではない。たとえば、吹雪や大雪
などの悪天候を牧民は予測することができないの
で、計画によるのではなく、その時そのときの天候
に応じて移動せざるをえない。また、たとえ順調に
良好な牧地に移動してきたとしても、牧地が雪で
埋もれた等の理由で家畜を追ってやってきた近隣
の遊牧集団がいたら、それを拒否することはできな
い。すると、確かな見込みをつけて獲得したにもか
かわらず、その牧地の衰退が早まることになる。

以上のようなことが不確かな移動をもたらす。だ
から、わざわざ固定畜舎を設置したり、牧草を刈っ
て備蓄しておいても、無駄になってしまう可能性が
大きいのである。

第二に、経験豊かな牧民が断言しているように、
柵に閉じ込めた飼育は家畜をひ弱にするという考
えが、牧民の間で根強い。

第三に、備蓄の草飼料では、家畜は水分の摂取
量が不足がちになり、消化に不調をきたす。

遊牧民が牧草の刈取や固定畜舎の設置に取り
組まなかった理由にこそ、アザロフも指摘したよ
うに、伝統的遊牧経営のあらゆる問題が集約され
ている¹⁰。

この問題は、決して、モンゴル人の性質、気質の
問題に矮小化されるものではなく、移動生活を必
要とし可能とする自然条件に対する遊牧民のぎり
ぎりの闘いを象徴しているのである。大地と家畜以
外に何も持たない、かつてのモンゴルの遊牧の民
は、その英知と努力で、過酷な自然と闘い調和し

て生きてきたのだ。

第二章 モンゴル遊牧社会の特徴と発展

1 自然経済と表裏一体

遊牧とは、一年を通じて、家畜の足によって自然
牧地を利用するものなので、農業と異なり、多種類
の労働用具を必要とせず、また、畜舎飼育する定
住の牧畜と比較しても、少ない労働力とコストで良
質のものを生産することができる。しかし、遊牧は、
生産性が低い上に、自然の直接的影響下にあっ
て、天災などで家畜を死なせ易いという弱点をもっ
ている。

中央アジアで牧畜が主産業になったのは、4000
～4500年前といわれる¹¹。その長い歴史に、遊牧
民は独自の文化を刻んできたのであるが、農耕民
と比較すると、経済、文化の発達が遅い、遅れ
ていることは否めない。

その原因は、遊牧の生産性の低さのみにあるの
ではない。「移動を繰り返すばかりでは、牧草地の
合理的利用と強化、冬用の草飼料の備蓄、農業
の発達、暖かい畜舎や住居の建設、理想的な文
化的生活づくりに対して、牧民は何の興味も抱か
なくなる¹²」と、H・ジャグバルが指摘したように、
遊牧社会の発展の遅れは、伝統的な遊牧社会の
あり方そのものにも起因している。

Д・トゥムルトゴーが、遊牧社会と自然経済との表
裏一体の関係について、以下のように述べてい
る¹³。

伝統的遊牧社会において、人々が家畜のみに
依拠して生活を維持できるのは、生産手段である

と同時に生活消費財でもあるという家畜自体の特質と関連する。放牧や移動といった生産過程において、家畜は労働手段になり、家畜から生産される毛、乳、肉などは、衣食住の殆どすべての必需品を充たす。また、仔家畜の出産は再生産、生活維持の保証となる。

遊牧生活の必需品の殆どすべてを、遊牧共同体内でまかなうことができるということは、牧民の生活を他産業の支配から免れさせる半面、常に家畜を従えての移動が強いられていることでもある。移動を繰り返す中で、自給自足を実現する生活は、自然経済を定着させ、分業の発展をおしとどめる。

さらに、どの家族も一律に遊牧を生業としているのでは、交換する物品は互いに同種のものとなり、需要も同時期に起こり、その上、住居が点々と散在しているために、商品交換は成立しにくく、商業があまり発達しない。逆に、分業や商品貨幣関係の未発達がますます、遊牧共同体内の自給自足を強化させ、自然経済を定着させるのである。

2 自然経済の崩壊

革命前までのモンゴル経済の発展にとって、何よりも大きな桎梏になっていたのは、清朝中国が課す重い税・賦役、中国商業・高利貸資本の浸透、ラマ僧の急増であった。だが、自給自足の歯車とよくかみ合い、自然経済の循環を断ち切りがたくしている遊牧生活そのものにも、その原因の一端がある。

モンゴルにおいて、自然経済の循環が断ち切られ始めるのは、外部からの影響力が強まった19世紀以降のことである。世界資本主義の波がモンゴルにも及び、商品貨幣関係の芽が伸び始めると

ともに、他方では「植民地の植民地」という状況が、国内の封建的経済基盤を急速に衰退させ始めた。

牧民は、自己の小経営の危機に直面して、牧畜技術の改善に努め、さらに、内外交易増大の時流に乗って、共同体内の自給自足の殻を破り、小商品生産者へと脱皮し始める。

こうして、19世紀中頃から、民族・階級意識の高まり、生活のための闘い、経営の改善といった進歩的思想がモンゴル社会に芽生えたのであった。

1852年、セツェン・ハン・アイマク(アイマクは国のすぐ下の地方行政単位)のトー・ワン・ザサク(管旗王侯)が書いた『生活の教え¹⁴』はその一例である。背景には、内外からの搾取の激化に加えて、天災や家畜の疫病の頻発による家畜の大幅な減少、牧民経営の著しい衰退があった。トー・ワンは、家畜の増大をめざして経営改善を細かく指示するのにとどまらず、農業、手工業などの新しい産業を奨励している。

家畜の出産時期が冬から春に切り換えられたことも、牧畜経営危機打開の画期的な方策となった。寒さが弱まり、日が伸び、雪が融け始め、多雪の心配がなくなる春に、仔家畜を出産させて、母子ともに無事に育てていたある地方のすぐれた経験が理解されるようになり、19世紀から20世紀にかけて、春に出産させる方式がハルハ・モンゴルのほぼ全域に広がったのである¹⁵。

家畜医療に関しては、数々のすぐれた伝統的療法が牧民の間で伝えられてきていたが、ロシア国境地域の牧民がロシア商人の影響を受けて、1910～1912年に12万頭近くの牛に予防接種を打ったのがきっかけで、近代的な家畜医療が普及し始め

た¹⁶。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、森林地帯、とりわけ北中央部のセレンゲ河流域で、木造の柵や固定畜舎がさかんに造られるようになり、移動が減少し始めた。ロシアや中国との交易が発達していたキャフタ、クーロンなどの都市の近郊に居住する牧民は、草刈、畜舎設置を行い、冬春にあまり移動しない半定住の生活を送っていた¹⁷。

モンゴル遊牧社会にぴったりと定着していた自然経済は19世紀以降、外部からの衝撃によって、ようやく崩れ始め、社会の有り様も、確実に変貌していくのであった。

3 土地も家畜も基本的生産手段

遊牧社会の特徴と発展を本質的に捉えようとするならば、生産関係、生産手段の所有関係を基本視点にすえるべきである。そのためには、まず、遊牧社会における基本的生産手段は何であるのかという問題を解決しなければならない。この問題については、その答えが土地か、家畜か、土地も家畜もかという具合に、盛んに論争されてきた¹⁸。

Д・トゥムルトゴーは、この問題を考えるとき、まず遊牧の生産過程に注目して、以下のように説明している¹⁹。

牧畜の基本的労働過程とは、家畜が牧地から草や水等を取り込むという、家畜の生理的再生産過程を利用した過程と、家畜によって、即ちその蹄行、糞によって牧地の土壌や植生が変化するという過程が、同時に進行する過程である。確かに、実際に人間が働く過程を見る限りでは、家畜が労働対象のようであるが、上述のように家畜の生理的作用

も含めた全労働過程を視野に入れるならば、人間は家畜を通して間接的に土地を利用するのであって、土地が労働対象、家畜が労働手段と考えるのが正しい。したがって遊牧の生産過程は、人間労働、牧地、家畜の三要素の相互作用によって進行する。

トゥムルトゴーは、生産過程の観点から、土地と家畜を、両者の弁証法的統一として、基本的生産手段とみなし、一方が主、他方が従という見方はしていないようである。では、生産手段の所有形態という観点から見ると、基本的生産手段である土地と家畜は、どのような意義を有するであろうか。

遊牧民は、農耕民ほどに土地を明確に区画することもなく、土地所有の観念も強く持たない。このことを理由に、遊牧民には土地所有が存在しないと見る研究者が少なくない。しかし、このような見方は、III・ナツァグドルジが批判したように、遊牧社会の農耕社会とは異なる土地所有形態の特殊性を見落としているのである²⁰。

遊牧社会では、家畜を介して、土地を牧地として利用するという生産過程の特殊性に基づき、利用する土地は家畜を通じて広げられる。歴史的にも、家畜の私的所有の後に、土地の私的所有が登場する²¹。家畜の私的所有の起こりが氏族共同体解体の原因となり、封建的關係が確立すると家畜のみならず、土地の私的所有も歴史的発展の決定的要因になったのである。

遊牧社会の封建支配階級は、直接的に土地を所有するのではないが、牧地の割当を始めとする土地管理の権利をもっているため、最も良好な牧地を利用することができる。したがって、事実上、

土地は封建支配層の所有下にあった²²。

アヨーシらの牧民運動(1911~1918年)の中で上程された訴訟文に、ザサック(管旗王侯)の土地支配を証拠づける2つの項目がある。

まず、7番目の項目に「ハチンのツェツェック湖の東西両側のボルハントから、イフボゴフの向こうのウラーンハイルハン、およびジャルツァンゴンボドルジの領地の境界に至るまでの全域を囲いこみ、ザサックのみの4種の家畜が放牧されています。課税家畜を抱えたタイジ(下級封建王侯)や牧民の中には、放牧する場所がなくなった者がおります²³」と、ザサックの土地収奪を訴えている。

また、41番目の項目には「ザサックが立入禁止にしていた牧地で放牧したために、罰家畜を科されました。ガンダン(馬)10頭、ダムディン(モンゴル牛)1頭、小ハルタル(去勢ヤク)1頭を取られました²⁴」と、ザサックの土地支配の一端が示されている。

このように遊牧社会においても、封建時代以後、土地所有は決定的意義をもつようになった。だが、それで家畜所有の重要性がうすれてしまったわけではなかった。

革命後、1924年に、土地は国家所有になったが、家畜に関しては何ら触れられなかった。そのため、家畜の大所有者であった封建階級上層や牧民の富裕層が、一般牧民を搾取する条件が残されたままであった。最大の家畜所有者である寺院は革命後、所有家畜頭数をさらに増やした。モンゴルの全寺院の所有する家畜総頭数は、1918年、182万295頭から、1924年、290万頭以上になり、また、所有家畜頭数が1万、10万頭クラスの寺院数が増

加している²⁵。封建時代に終止符を打った人民革命の後も、生産手段としての家畜の重要性は変わることがなく、家畜問題を放置して、土地問題のみを解決しても、それが農業問題の基本的解決に結びつかなかったのである²⁶。

遊牧社会の基本的生産手段として、土地と家畜は統一的に捉えられるべきだろう。基本的生産手段のこうした特殊性は、モンゴルの自然と遊牧の生産過程から作り出されたのであり、モンゴル遊牧社会の所有形態や歴史に反映する。

4 遊牧共同体の移り変わり

遊牧社会の特徴を映し出す小さな鏡は、生産単位であり、共同労働組織である遊牧共同体だ²⁷。遊牧共同体の移り変わりを通じてモンゴル遊牧社会の発展の大枠をおさえておこう²⁸。

狩猟を生活の糧としていた原始共同体時代、民族的な共同所有と共同労働を基礎とする血縁的氏族共同体=フレイ共同体(хүрээ)が生産単位であり、経済全体であった。フレイ共同体は、生産のほかに祭祀、防衛などあらゆる社会の機能を有していた。

遊牧の生産力が次第に発展していき、11世紀から12世紀にかけて、狩猟の採集経済から、牧畜・遊牧の生産的経済への「最初の大きな分業」が起こった。同時に、共同体所有、血縁的紐帯が崩れ始めて、単婚家族からなる大家族共同体=アイル共同体(айл)が現れ、フレイ共同体の解体が進む。しかし、個々の小家族の力はまだ弱く、家畜は依然として共同所有になっていた。アイル共同体の時代は、民族的共同所有から、単婚家族の私的

所有に向かう過渡期にあたる。

個々の単婚家族は、その経営能力を高め、私的所有者、経済整体として独立するに至り、アイル共同体は解体の運命をたどる。だが、個々の小家族はまだ共同労働を必要とする生産力段階にある。そこで、地縁的遊牧共同体＝ホト・アイル共同体(хот айл)が成立する。ホト・アイル共同体は、牧畜の生産力が飛躍的に伸び²⁹、封建領主制が確立した14、15世紀の時代に始まり、1921年の革命後、社会主義への移行期を経て、社会主義農牧協同組合＝ネグデルの生産単位ソーリ(суурь)が確立する1960年まで約700年間存続した。

封建時代のホト・アイル共同体では、放牧、フェルト作り、井戸掘り、搾乳、狩猟等の共同労働の習慣が定着し、また、今日に至るまでの伝統的牧畜技術の基礎が築かれた。生産単位であり、牧民運動の基盤でもあったホト・アイル共同体は、社会主義生産単位ソーリに継承・発展するものとして、名実ともに、最後のモンゴル遊牧共同体である。

- 1 И.М.Майский (1921) "Современная Монголия" Иркутск [同書邦訳収録 南満州鉄道株式会社庶務部調査課編(1927)『外蒙古共和国(上下編)』大阪毎日新聞社]
- 2 南満州鉄道株式会社庶務部調査課編(1927)『外蒙古共和国(上下編)』大阪毎日新聞社、119 頁
- 3 同上
- 4 同上、120 頁
- 5 同上、120-121 頁
- 6 И.Я.Златкин (1957) "Очерки новейшей истории монголии" Москва, стр.6
- 7 Д.Банзрагч, Ц.Даваажамц (1970) "Белчээр ашиглах арга" Улаанбаатар. Б.Мягмаржав (1974) "Малчдын нүүдлын үндсэн асуудал" УБ, 7-р тал
- 8 Д.Гонгор (1978) "Халх товчоон II" УБ,308-р тал И.Ф.Шульженко (1957) "Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын мал аж ахуй" УБ, 26-р тал
- 9 С.Азаров (1933) 'Животноводческой техника качественного хозяйства' "Современная Монголия"№2, УБ, стр.28-29
- 10 Там же, стр28
- 11 И.Ф.Шульженко(1957) , Дурдсан зохиол, 15-р тал
- 12 Н.Жагварал (1974) "Аратство и аратское хозяйство" УБ, стр129
- 13 Д.Төмөртоого (1975) 'Нүүдэлч бүлгийн тухай' "Түүхийн судлал"УБ, X, 69, 75-76-р тал. (1983) "Мал аж ахуйн хөдөлмөр" УБ, 19-21-р тал
- 14 Ш.Нацагдорж (1968) "То ван түүний сургаал" УБ
- 15 Ц.Насанбалжир (1978) "Монголын аж ахуй хөтлөлтийн уламжлал, шинэтгэл (XIX зууны эцэс XX зууны эхэн)" УБ, 13-14-р тал
- 16 Мөн тэнд, 14-15-р тал
- 17 Мөн тэнд, 16, 20-р тал
- 18 Ш.Нацагдорж (1978) "Монголын феодализмын үндсэн замнал" УБ, 26-37-р тал
Б.Мягмаржав (1985) "Бэлчээрийн мал аж ахуйн эдийн засгийн зарим асуудал" УБ, 76-р тал
Д.Төмөртоого (1983) "Мал аж ахуйн хөдөлмөр" УБ, 42-43-р тал
- 19 Д.Төмөртоого "Мал аж ахуйн хөдөлмөр" УБ, 47-59-р тал
- 20 Ш.Нацагдорж (1978) "Монголын феодализмын үндсэн замнал" УБ, 27-28-р тал
- 21 Мөн тэнд, 31-р тал
- 22 Мөн тэнд, 179-181-р тал Д.Гонгор, Дурдсан зохиол , 289-291-р тал
- 23 Ш.Нацагдорж, Ц.Насанбалжир эмхтгэн боловсруулсан (1968) "Ардын заргын бичиг" УБ, 152-р тал
- 24 Мөн тэнд, 155-р тал
- 25 С.Пүрэвжав (1978) "Монгол дахь шарын шашны хураангуй түүх" УБ, 140-р тал
- 26 Ш・ナツアグドルジは、土地も家畜も基本的生産手段だが、土地の方をより主要な生産手段とみる立場から、封建関係を廃止する際、家畜問題は、土地問題に次ぐ二次的1問題だとし、封建的關係の残存物と闘うなかで解決す

べきものだと述べている(Ш.Нацагдорж "Монголын феодализмын үндсэн замнал" УБ, 407-р тал)。しかし、家畜の所有問題が後回しになったのは、彼自身、強調しているように、家畜の大所有者である寺院に対する対策のむずかしさに起因するのであって、家畜の生産手段としての二次的意義によるものではない。第一に、寺院の家畜は、上層ラマ僧の所有財産ではなく、全ラマ僧の宗教活動のための共有財産だと考えられていたこと、第二に、多くの牧民が、寺院の家畜放牧に雇われていたこと、主にこの二つのことが理由で、寺院問題および、これと密接に関連する家畜所有問題を急激に解決することはできなかつたのである(Мөн тэнд, 395-397-р тал)。

27 Д.Төмөртоого (1975) 'Нүүдэлч бүлгийн тухай' "Түүхийн судлал" УБ, X, 70-р тал

28 Д.Төмөртоого 'Нүүдэлч бүлгийн тухай', "Мал аж ахуйн хөдөлмөр" 80-101-р тал
小貫雅男(1985)『遊牧社会の現代』青木書店、40-47 頁

29 Ш・ナツアグドルジは、15 世紀にモンゴルの牧畜の生産力が飛躍的に伸びた根拠として、その頃から罰家畜が刑罰として一般化し、科される頭数も少なくなかったこと、また、支配階級の剰余生産物獲得法が、外国遠征による強奪から、税による国内牧民収奪に変わったことをあげている(Ш.Нацагдорж "Монголын феодализмын үндсэн замнал" УБ, 136-139-р тал)